

受賞者氏名	長岡 健	
所属	経営学部 経営学科	
受賞年月日	2020年8月19日	
国内・国外	国内	
授与機関等名称	コンピュータ利用教育学会	
受賞名	2020 PCカンファレンス 最優秀論文賞	
受賞(研究)内容詳細	<p style="text-align: center;">対話型大規模講義のオンライン化 - 受講生/教員間インタラクションに関する考察 -</p> <p>学生の考える力をいかに醸成するかは、経営教育に限らず、大学教育における重要なテーマである。筆者が担当する『経営組織論Ⅰ・Ⅱ』ではこの点を重視し、「専門知識の習得」よりも「考える力の醸成」に学習目的の重点をおいてきたが、授業デザインの特徴としては以下3点が挙げられる。</p> <p>第一の特徴は、「考えながら聞く、聞きながら考える」ことの意識づけである。受講生は情報のインプットを意識した授業態度になりがちだが、考える力を醸成するにはその意識を変える必要がある。そこで、「聞く」と「考える」を並列的に行うことを繰り返し強調した。第二の特徴は、対話構造に関連している。エスノメソドロジー研究が明らかにしたように、受講生/教員間の対話において、コミュニケーションの主導権は常に教員にある。それに対して、『経営組織論Ⅰ・Ⅱ』では、教員主導型のコミュニケーション・パターンを崩し、学生が主体的に考えながら対話を主導することを目指した。第三の特徴は、学生主導の対話を生成するツールとして、twitterを採用したことである。なお、受講生に指示したtwitterの使い方は以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 授業時間中は常にtwitterにアクセスできる状態にする。 ② 受講しながら、印象、気づき、疑問などを、リアルタイムで書き込む。 ③ twitterに書き込まれた内容は、教員と受講者全員で共有する。 ④ 受講生の書き込みに対しては、授業終了後、教員がコメントを返す。 <p>『経営組織論Ⅰ・Ⅱ』におけるtwitterを活用した対話型授業は、2017年度から200名規模の教室で実施してきたが、2020年度は、新型コロナウイルス感染症の影響拡大により、zoomを使ったオンライン授業として実施した。では、授業のオンライン化によって、学習態度はどのように変化したのか。この点に関して、2019年度（対面授業）と2020年度（オンライン授業）の比較分析を行った。</p> <p>その結果、2020年度授業では、twitterへの書き込み数が増加していることが明らかとなった。ここから、受講生が積極的なtwitterへの書き込みを通じて、「考える力の醸成」に主体的に取り組んでいた姿勢を読み取ることができる。</p> <p>また、質的な変化として、教員からの質問に反応するだけではなく、学習態度の主体性も見いだせた。例えば、講義で言及された概念・理論に直接関連する気づきや疑問だけでなく、「講義内容と現実世界での自分の活動との関係」や「講義中の自分の学習の振り返り」に関するtwitterへの書き込みが見いだせたことは、情報のインプットを意識した授業態度が変化し、受講生が「考えながら聞く、聞きながら考える」ことを実践しつつあることを示していると言えよう。</p> <p>これらの点を踏まえると、受講生/教員間インタラクションにおいて、教員主導型のコミュニケーション・パターンが崩れていく可能性を見いだすことができる。教員と受講生間の権力関係によって、教室内の口頭での対話は「教員の主導(Initiative)」「学生の反応(Response)」「教員の評価(Evaluation)」というIRE構造に従うことになる。そして、この構造に従って対話が進む限り、受講生の発言は「反応」に過ぎず、受講生の主体性は限定的な範囲でしか発揮されない。それに対して、twitterを使うことで、受講生は「教員の主導」に従うことなく自由なタイミングで、自由な内容の発言が可能となった。その結果として、教員からの質問を起点とするのではなく、twitterへの書き込みを通じた受講生の自発的な発言から対話を開始する状況が多数発生したと考えられる。</p> <p>ただし、受講生/教員間インタラクションがどの程度までIRE構造から脱したコミュニケーションとなるかについては、さらに参与観察を継続した上で判断すべきであると考えられる。また、zoomを使ったオンライン授業において、受講生のツイート数が大幅に増加し、ツイート内容が多様化した要因については、学習空間・メディアの変化や、社会環境の変化を踏まえつつ、受講生と教員のコミュニケーションという視点から考察をさらに進めていくことが必要である。</p>	